

チベット、ネパールなど、一般に「辺境」などとも呼ばれているアジアの人々の生活を見つめてきた者として、今日の美術教育や美術教師の有り様を論じて欲しいというものだった。ところが3月11日の大震災によって、状況が一変したのである。そこで本来の原稿依頼に関わるテーマについて論及しておきたい。それはもちろん、現在私が直面しているこの事態に共振する課題が立ち上がってくると思われるからだ。

この10数年、私は画家として、モンゴル平原やチベット、ネパール方面に遊牧の民を追う取材の旅を続けてきた。

チベット高原を初めて訪れた頃、遊牧民との忘れ難い出会いがあった。

私が訪ねたチベットの高原は、もとより旅行者のためのホテルなどはどこにもない茫漠とした草原の地である。そこで私は遊牧民のテントを見つけ、彼らの習慣に従い一夜の宿を申し出た。すると彼らはしばらく話し合った後、見ず知らずの私を笑顔で受け入れてくれたのである。そのうえ大切にしている羊を屠り、遠来の客人をあたかも身内のように家族全員での歓待してくれた。私は結局、一つのテントで寝食を共にする数日を過ごすことになった。

遊牧民の朝は早い。まだ朝霞に包まれているテントの中で誰に指示されることもなく、家族全員が各々の持ち分でせっせと体を動かし始める。ヤクやヤギの搾乳をする者、近くの池から水を汲んでくる人、唯一の燃料であるヤクの糞を拾い集めてくる係。ここでは子どもも一人前の働き手だ。テントの中ではフイゴを使って湯が沸かされる。お湯が沸きあがると、その鍋を外に持ち出して天空高く掲げて大自然に祈りを捧げる。こうしてようやく全員が揃っての朝食となる。

朝食はツアンパという裸麦を煎って粉にしたものを団子状に固めたものと、搾りたてのヤギ乳にお茶を加えドモという筒で攪拌したバター茶のみだ。団らんのうちに朝食を済ませると、家畜をまとめて放牧に行く者、搾乳したばかりの乳で乳製品を造る者など、それぞれがたんたんと働く一日が始まる。

このようにして、秘境とも呼ばれる高所でチベットの遊牧民はヤクやヤギなどを放牧しながら、自給自足の生活を営んでいる。そこでは自分たちが生きるための最小限の糧を得ながら、大地を畏れ、敬い、信じる心を持って、家族が一丸となって生きていた。そこには純真無垢な静かな笑顔があった。そして、その穏やかな笑顔のなかで数日間を過ごした私は全身の隅々の血一滴までが浄化された気がした。